

あい 藍



四季報 43 で取り上げた紅を調べているときに、あらためて気になったのが藍でした。藍染は日本の代表的な染色法ですが、紅花染が絹織物など高級素材に用いられたのに対し、藍は木綿などの日常使う素材の染色に用いられました。

藍染の歴史は、古代エジプトまでさかのぼるといいます。藍の色を生み出す植物の種類はいくつかありますが、日本では、タデアイが使われてきました。タデアイの葉は緑色ですが、そこから藍の色を取り出した古代の知恵には驚いてしまいます。日本には奈良時代に入ってきたといえます。

植物の色素を原料とする染色は、ほとんどが自生する植物を採取して用いるのですが、藍と紅花は畑で栽培したものです。



タデアイ



薬 (すくも)、藍玉

タデアイを刻んで発酵させたものを薬 (すくも) あるいは藍玉といえます。この藍玉を用い、さらに染色できるようにすることを、「藍を建てる」といいます。土中に埋められた藍甕 (あいがめ) のなかで藍は建てられます。

そこに、糸、織物などを入れて染色するわけですが、染をくりかえすことで、薄青から濃い藍色まで染めることができます。

藍が、日本で急速に普及したのは、江戸時代に入ってからです。その背景には、木綿の普及がありました。日本には、室町末期に入ってきた木綿は、またたくまに普及し、その染色方法として藍染が急速に広がっていきました。そして、藍色は、農家の野良着から、商家の暖簾まで、実に多様に使われました。藍染の藍色は、ジャパンプルーとも呼ばれ、世界で注目されるようになっていったのです。

ちなみに、フランス印象派絵画に大きな影響をあたえた広重らの浮世絵版画のブルーもまた、藍の染料が使われたものです。



藍甕のならんだ藍染工場

藍染の普及は、藍玉の供給体制が整っていなければなりません。藍の生産が最も盛んだったのは、徳島県でした。当時の阿波藩では、藍作りを奨励し、全国に売り歩きました。「阿波25万石、藍50万石」と呼ばれるほど、藍の生産は盛んでした。こういった商品作物の生産が、西日本を中心にした商品経済の発展をもたらしていったわけです。

徳島県には、現在も藍の生産にたずさわったことを示す豪農の家が、資料館、記念館として残されています。

このように発展した藍ですが、幕末、明治になると、インド、中国からの輸入品に押され徐々に生産量は減ってきます。そして、合成染料の登場とともに、藍の生産は衰退してしまいます。

しかし、天然藍には合成染料とは全く違った色合い、風合いがあり、いまでも量は少ないものの、着実に生産されています。

(八代 啓一)



徳島県藍住町にある「藍の館」
藍の歴史を知るだけでなく、藍染
体験もできる。